法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-14

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title) 日本文學誌要 (巻 / Volume) 23 (開始ページ / Start Page) 136 (終了ページ / End Page) 136 (発行年 / Year) 1980-02-10

近藤忠義・小原元追悼号発行にあたって日本文学誌要 第33号

が、学会の存立の意義そのものが、その構成 対応に追われて実務に携ることが不可能であ できよう。学会は、その間、学生委員会が主 員にとって不可欠のものであると自覚されて しえなくなったこと、などがその原因である ったこと、また事務を担当し得るものが存在 た。大学問題の激しい運動のさなかで、その を負担するだけであった。 催する講演会などの活動に、その経費の一部 いなかったことが根本にある、ということも ほぼ十年ほどにわたって、国文学会は独自 のないまま、その機能を停止し てい

号として、一九七四年に一回、『誌要』 されただけで、 行して以来、学生委員会の手によって、 小原元教授追悼として、 授を病魔に奪われることになったのである。 で、一九七五年四月、われわれは、 に休刊が続いてきた。そのような状態のなか にその準備がはじめられた。本誌の追悼文は 一九七〇年に、日本文学誌要 という声はその直後からおこり、 『誌要』も学会の停滞ととも 『誌要』を再刊した 第22号を発 小原元教 ただち 臨時 が 出

> た。 その後間もなく寄せられたものから収められ で、 当の中心がないままである。それから今日ま 授の追悼を、ということになって、 じ月、こんどは近藤忠義教授の逝去にあっ はかどらない内、その翌年、 ている。中 の 依頼もはじめた。といっても、なお事務担 そして、すすめていた『誌要』は、 まる三年が経過してしまった。 心の担当者のないままに、 一九七六年の同 論文執筆 編集も 両教

間 て、 章もよせられたが、なお若干の問題がのこっ 開することが可能となった。 になったのとあわせて、 当者の財政的措置を乏しいながら講じること かれ、二年前から大学が日本文学科の事務! がととのい、 んど集り、 ることになったが、 て盛況裡に終り、 の 0 画・編集の三部門にわかれて、 選出された。委員は従来のように、 ないままに、単独ですすめていたため、 卒業生から、半世紀におよぶ幅の参加を 九七八年四月には、本号掲載の論文は殆 ようやく一九七九年六月、原稿のすべて 本年の正月には、十年ぶりで総会がひら 九月には、 刊行のはこびとなった。その 今後の運営にあたる委員 本号が編集部という組織 近藤忠義教授追悼の文 国文学会の活動を再 総会は昭和初期 実務を担当な 事務・今

> 号発行までのいきさつのあらましを記した。 らないであろう。 割などが、改めて検討されていかなければな かで、 れることになる。 編集部のもとに、 をおかけしてしまったが、 想をこえて遅延し、寄稿の方々に多大の 環として『日本文学誌要』の刊行が続けら 国文学会の存在意義や、 とにかく活動を再開するな 国文学会の組織的な活動 「あとがき」 次号からは新しい にかえて、 誌要刊行の役

編 集 去段大学国	日本文学誌要第	一九八〇年二月一〇日発行	
文学会	第二三号		

予 織 す 企	: \ \ \hat{x}	·	と担り	0) (っ 又
振替東京六九四三元電話代表〇三(26)九四〇八法政大學國文學會	発 行 東京都千代田区富士見町二	電話○三(86)五三七五印刷株式会社溪 声 社	編 集 法政大学国文学会	日本文学誌要 第二三号	一九八〇年二月一〇日発行